

“いつくしき学び舎”

二女

二女一期生 武村 幸子

昭和十一年（一九三六年）に開校した岡山県第二高等女学校だったが岡山大空襲（昭和二十年六月）で焼失。

もともと二女としての専有の校舎はなく女子師範の一教室を借りての発足であった。全学年が揃った昭和十五年には女子師範の主棟校舎の一階の五教室と職員室兼図書室一室を借り二女の校舎に当てた。先生方は校長先生はじめ教科の先生は兼務で二女の専任はお二人だけだった。今思えば教育の目的も指導の方針も異なる両校が併設というのは何としても唐突なように思うが時代の背景や県の財政などの事情もあり止むを得ないことだったのか？しかし生徒にとっては借物教室であれ戦時色も左程濃くなく明るく楽しく青春を謳歌できたように思う。そして女子師範の傘の下で校外での行事の体育祭や遠足などはすべて師範生の後からついていった。しかし時代は次第に戦争のかけがえが濃くなり、二女としてのたった一つ新築されていた研究科の建物も使われなくなり、生徒達は教室を出て勤労作業が多くなり、遂には勤



天皇奉迎（昭和22年）

器廠、海軍衣料廠、



昭和21年再建された二女校舎

軍需工場へと直行する日々だった。そして二十年六月二十九日、岡山大空襲により校舎は全焼。開校十年にして二女は自分達の校舎を持つことなく、借物の校舎さえ失って更に厳しい間借教室を余儀なくされ分散授業となった。ある学年は公会堂で、ある学年は後楽園の土手での青空教室で。

私は縁あって空襲の半年前、二月に二女に奉職し、自分の目で校舎の最後を見届けることになった。校舎の焼失は断腸の思いがし、焼け落ちた跡は二日たつても熱かったことが忘れられない。二十年九月には何とか学校は再開されたが、職員室は焼け残った温室の枠を焼トタンと板で覆い生徒は運動場で集まり焼跡整理だった。以来六十年、現在は校舎跡さえ無く高等女学校の制度も新しい学校制度になつたけれど、卒業生の胸には往時の面影が深く残っているはずである。



旧六高校門に「岡山県朝日高等学校」の門標



統合のため増設された校舎（昭和28年）

朝日高



昭和42年頃の校舎



昭和25～44年の木造校舎